



安全に配慮しながらの現場の采配。体力と精神力、行動力が必須



目視でガントリークレーンを巧みに操る野田さん

特集
女性の活躍

全員参加型の現場を目指して

一人一人が輝ける 港湾管理事業への 変革に挑む



野田貴美子さん(34)

1986年、八代市生まれ。2005年県立八代東高校卒業後、地元の病院に医療事務として勤務。結婚を機に退職。2007年長女を出産。2010年、松木運輸に入社。2014年から正社員として港湾事業部へ異動。2016年八代港コンテナターミナルの管理責任者に。2017年、女性で国内初のガントリークレーン運転資格取得。2019年、全国女性消防操法大会全国優勝。2020年、「HigoROCKa」アワードファイナリスト。

八代港にある松木運輸株式会社港湾事業部でコンテナターミナルの所長を務める野田貴美子さん。港湾業務の管理責任者として手腕を発揮する傍ら、港湾荷役の花形といわれるガントリークレーンの運転士の資格取得、女性としては国内第1号として活躍するパワフルウーマンです。地域活動においても15年の長きにわたり消防団活動を行い、昨年11月に行われた全国女性消防操法大会で見事優勝。バイタリティーあふれる行動力の源を取材しました。

副社長に直談判、入社6年で パートから港湾の責任者へ

「高校3年間はソフトボールに熱中し、インターハイ九州大会優勝、全国大会に出場した経験もあるんですよ。キラキラした瞳を向ける野田貴美子さんは高校卒業後、地元の病院に事務職として勤務。結婚と同時に退職し、長女出産後は、専業主婦として1年間を過ごしました。

「もともと家にじっとしてられない性格。早く社会復帰したいと、親戚が務めていた松木運輸で人材募集をしていると聞き、すぐに応募しましたと話します。

最初はパートで、鉄くずの集積場となるスクラップ事業で事務を担当。しばらくすると、「もともと本格的に、任せてもらえる仕事があった」と思うようになり、ある日副社長に「早く正社員にしてほしい」と直談判したそうです。

野田さんの熱意とこれまでの仕事ぶりが評価され、八代港のコンテナヤードにある港湾事業部八代港コンテナターミナルに正社員として異動。「事務を

担当する女性スタッフはいましたが、現場はほぼ男性社会。それでも自分が望んで来たからには、絶対ここで結果を残す。前へ進むしかない」と、持ち前の明るさと行動力で仕事に丁寧に取り組みました。

知識と技術を磨き 男性と同じフィールドに立つ

異動からわずか2年で、ターミナルを統括する所長に抜擢された野田さん。とにかく現場はベテランぞろいの男性社会。当初は、「女のくせに」「ポツと出た女性に何ができる」と心無い言葉を浴びせられたこともあります。それでも私は、責任者として彼らを管理していかなければならない。歯がゆい思いもりましたが、彼らが現場で何をみて、何を感じながら仕事をしているのかを知るためには、同じ知識と技術を身に付け、同じフィールドに立つしかない。当時男性しか資格を持つ人がいなかったガントリークレーンのオペレーターの資格取得を決意しました。

所長としての業務と並行して、オペ

レーターの資格を取るため、広島にある学校に入校。「もちろん子育て中でしたので、時間はありません。実習は厳しいけれど1週間と短期間で資格取得ができる場所を選びました」と野田さん。その後久留米市で学科試験を受け、さらに愛知県にある実技実践校に再入校し、ようやく国内女性第1号となるガントリークレーン運転免許を取得しました。

さらに今年2月には、港を走り回る大型車ストラドルキャリアの運転資格も取得。全国的にも例のない、港湾荷役現場に女性が従事するという新風を吹き込みました。

地上37メートルの現場 柔軟な操作技術を生かして

野田さんはコンテナターミナルの運営、管理はもちろん、技術資格取得者としてガントリークレーンの操作もしています。海風が吹き寄せる地上37メートルの現場。港についた貨物を上から目視し、寸分の狂いなくクレーンを操る姿に、技術者としての誇りと頼もしさを感じます。

「男性社会といわれる中でも、男性に負けないスキルと知識を身に付ければ、新たな仕事のフィールドを開拓できる。男性の職種という自分自身の垣根を取り払うことで、可能性は大きく広がるはずです」と野田さんは力を込めます。これらの思いから、多くの視察や学

校の見学受け入れを積極的に行い、「子どもたちの将来の職業選択の幅を今以上に広げていきたい」と語る野田さん。見て、触れて、感じられる港づくり、そして一人一人が輝ける「全員参加型」の現場を目指して、これまでとは違った野田さんならではの視点を組み込みながら、歩みを加速しています。

誰もが自分の思いを 実現できる社会へ

野田さんは消防士である実父の影響もあり、15年前から地域の消防団に入団し、「自分を育ててくれた地域に恩返しをしたい」と、その活動に力を注いでいます。仕事と家事、中2、小2のお子さんの子育てを両立しながら、日々の厳しい訓練でもリーダーシップを発揮。昨年11月に開催された全国女性消防操法大会に出場し、見事全国優勝を果たしました。

「女性だから、母親になったからといって、やりたいことを諦める必要はない。人としての生き方に優劣はないはずだから」と前を見据える野田さん。ただそこには、「家族や周囲の協力は不可欠」と付け加えます。

女性としての活躍の道筋を家族と共有しながら、誰もが自分の思いを実現できる社会へ向け、これからも前へ前へ突き進んでいきます。



危険と隣り合わせの現場。打ち合わせは綿密に行います

港湾の花形ともいえるガントリークレーン(写真右)とストラドルキャリア(写真下)。野田さんは、女性で両方の運転資格を持つ国内唯一の人材



今年1月に開催された女性活躍サミットでの「HigoROCKa」アワードファイナリストとして発表する野田さん



全国女性消防操法大会で全国優勝を果たした八代本部女性消防隊のメンバーと



ようやく港湾の仕事を理解してくれるようになった子どもたち。休日是一緒に料理をしたりする